
性的被害者が裁判を決意する 第1章 忘れようにも忘れられない苦悩

月夜の猫貴族

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性的被害者が裁判を決意する 第1章 忘れようにも忘
れられない苦悩

【Nコード】

N3359Y

【作者名】

月夜の猫貴族

【あらすじ】

自分自身の性的被害者としての生い立ちと苦悩。そして絶望から希望をつかむ道のりをつつ、りました

おばあちゃん家に行く

もしも、あなたが女性で、性的犯罪の被害者になってしまったらまず、何を思いますか？

私の場合はたぶん、まともな結婚生活は送れない人間になるだろう、と将来を悲観しました。

私が性的被害者になってしまったのは、だいたい4歳の時でした。あまりにも幼い時期に受けた傷はあまりにも深く、そしてその後の人生を長い間苦しめ続けました。ました、と表現すると、今は苦しみから、解放されたと思うかもしれませんが、現在39歳になった今でも苦しみをゼロにすることはできません。だから、過去に起きた事件であっても、私にはまったく過去のものとして流せない現実があります。私に限らず、性的被害者の多くの方々の多くは、幼い時期でなく、二十歳を過ぎた時期であろうが、そのような事件にあった場合、のちの人生を変えてしまうほどの傷を抱えてしまうと思います。

例えていうなら、戦争体験などにも似ているようで、経験者と未経験者ではまったく人生観が違うように、一度でもそのような衝撃的な恐怖体験をすると、忘れようにも忘れられない、といった人生を送るといった点で似ているだろうと私も思います。また、幼稚園児だった4歳という幼い私に起きた事件。

おじによる性的虐待。

おじというのは、母親の弟で、私の実の叔父の事である。

そんな身近な相手からの性的虐待はまだ幼すぎる4歳には理解することは到底できない事件だった。

その事件は日常生活の中にごく自然なことのようだった。母親と私は当時、母の実家であるおばあちゃん家にいつものように遊びに行った。まだ、私は幼かったので、母親の行くところに一緒にくっついて行動していた。母はいつもおばあちゃん家に行くとおば

あちゃんと2人で世間話にはなをさかせ、私はどうとどうも母の弟の叔父が遊んでくれる、という流れになっていた。

おばあちゃん家に行く（後書き）

叔父と私はおばあちゃん家に行くといつも遊んでいた。

叔父はパチンコ台とパチンコ玉を持っていて、玉の動きと音が楽しくて、当たりもしないのに夢中で遊んだりした。

ある時は倉庫の中を探検したりもした。暗い倉庫の中で何を見つけただけではなかったが、ちょっとないシチュエーションにわくわくしていたような気がする。

罪悪感

母はおばあちゃん家に多い時で週に二回くらい行っていた。少なくとも10日に一度は訪れていた。もちろん、いつも私を連れて。

いつものように、母はおばあちゃんと、私はおじとそれぞれに別れて遊びはじめた。

その日もおじに特に変わった様子もなく、私は二階の部屋について行った。

二階の部屋に入り、おじはある人形を私に見せた。それは手のひらに乗るくらいのおおきさで、裸の男と女が向かい合わせになっているというものだった。手で少し動かすと男がちょうど、腰のあたりを前後に動くようになっていた。私は人形に不自然な印象を感じたのを覚えている。裸の男のオチンチンが体に対して不自然に持ち上がっていたのだ。ダランとしていないのである。なんだこの人形、変なのっ！そんなありもしないようになって。

まだ、4歳の幼い私には男の人のオチンチンはダランとしている、そういうものだと思っていた。現実には成人の男のオチンチンは勃起するということをしらずに知ることになるにしても、まだまだ、知る必要もない年齢の私におじは愉快そうに人形を見せつけた。納得のいかない私の様子を眺めたあとおじは、さらに調子に乗り、私に自分の勃起したモノをみせつけたのだった。

わけがわからなかった。しかも、おじはその勃起したモノを手で握って上下にうごかして欲しいと私に要求してきた。

何の為に？

そうは思ったが、いつも遊び相手になってくれていたおじが自分に悪いことをしようとしているとは気がつかず、逃げなければといった判断も私にはできなかった。

ただ、なんか変な遊び方だなあとは感じてはいた。ちよつと気持ちが悪いなあとも感じていた。

でも、嫌がったら悪い気がしたようにも思う。

母にはこの遊びは話せないでいた。何故かわからないが、2人だけの内緒の遊びにしなくてはいけない気がした。

ひよつとしたら、おじに口止めするように言われたのかもしれないが、正確には思い出せない。

あまりにも衝撃的だった。

言葉を失うくらいの衝撃だった。

性の知識がまったくない幼すぎた私には変な生き物のようにも思えた。

おじは極端に強引なことをするとか、痛いことをするわけではなかったが、私が母とおばあちゃん家にくるとそれ以後も必ず関係を求めてきた。

さらにおじはエスカレートしていき、私の下半身もまさぐるようになっていた。

何故、私は嫌がらなかったのだろうか？

推測だが、私の両親は知らない人についてっちゃダメよ、といった

幼児期にまず教わる自分の身を守る為の教えをしなかったようにおもう。でなければ、下半身を他人に触られてもいけないことをされていると判断できないのも納得がいく。

私はおじの要求を嫌がったり、泣いたり、怒ったりできなかった。それができていれば、だらだらと毎回おばあちゃんにきてはおじの要求をのむという関係をしなくてすんだであろう。

母もいけないのだ。自分がおばあちゃんのおしゃべりに夢中で私のことを放ったままにしていた。おじに預けていて安心してたようだが、安心しきってた。たまには何して遊んでいるのかな？と顔でも出すくらいすれば良かったのに。

そういった、状況だった為私とおじの関係は幾度も繰り返された。

しかし、とうとう終わりを迎えた。

おばあちゃんに目撃されたのだ。

おばあちゃんとおじと私。

みな固まっていた。おばあちゃんが何て言ったかは覚えていない。しかし、今までに見たことのない表情で見つめていた。怒っているような悲しんでいるような、一言で言い表せない表情で、下の部屋に2人とも降りてくるよう言われた。

こんなこと二度としてはいけません。

他にもいくつか言われたのかもしれないが、印象に残ったのはその言葉だった。

その時、ことを聞きつけた母がそばにいたはずなのだが、あまり覚えていない。

やっぱり怒られるようなことをしていたんだ。

私はそう思った、そしておばあちゃんと母の顔色をみて、何かとんでもなく悪いことをしてしまったのだと思い、罪悪感を感じた。

そして、その日を境に私はおばあちゃん家に母と行かなくなった。

私はその時母になんて言葉を話せばいいかわからなかった。とにかく深い罪悪感が胸いっぱいにくらみ、母の反応にびくびくだったように思う。

しかし、悪いのはおじであって私は悪くなかったと、のちに成長した頃の私は思えるようになるのだが、
一般に性的な事件の被害者は罪悪感をもちやすいのだときく。自分にもすぎがあったから悪いんだとか、あの時あの道を通った自分が悪いんだとか。

でも、被害者は被害者なのであって、悪いのは絶対的に相手が悪いのであるから、自分で自分を慰めてあげるくらいでいいと思う。

私は4歳という幼い時期で性のこともよくわからないから何もかも忘れてしまっただろうと思われたみたいだったが、程度にもよると思う、まず忘れないものだと思う。

私は母に抱きしめて欲しかった。そして何度も何度もお前は悪くない、お前は悪くないのだと言い聞かせて欲しかった。

でも私の望むようなことを母にしてもらえなかった。

母に言わせれば、私が泣き出したりしないから、心に深いダメージがあることがわからなかったのかもしれない。でもそんなに単純に泣くような子供でなかったし、当惑していてどうしていいかわからなかった

わたしは取り返しのつかない何かをしてしまったようだと強烈にインプットしてしまった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359y/>

性的被害者が裁判を決意する 第1章 忘れようにも忘れられない苦悩

2011年11月9日00時13分発行